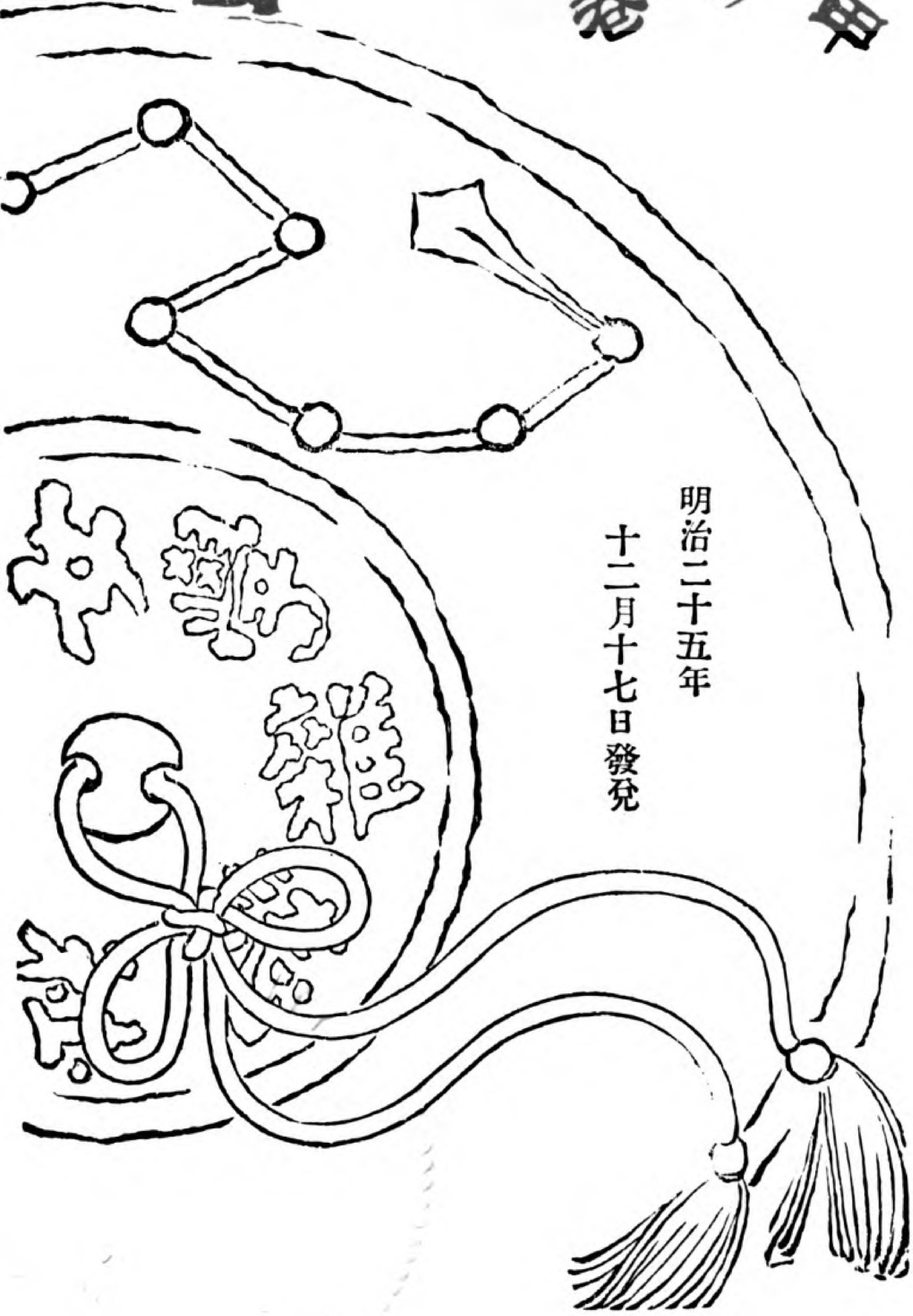
no. 334-1

# 女學雜誌

第三百三拾四號
甲の巻



明治二十五年十二月十七日發兌

## 注意

●社説 荒野一望（教育界。經濟界。文學界。宗教界。政治界）

●批評 罪と罰（透谷子評）○大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評（雲峯子）○志賀重昂氏地理學講義

●史傳 韓非子を觀る（天知子）

●雜錄 紅蘭詩集を讀む（泣血生）

●摘要 基督教徒中の文學者美術家

●時事 王佐○面白くなし○高利の內國債 ○千島艦沈沒 ○將軍老ひたり○其二○其三○學生の發火演習○福澤先生の義俠 ○新次官の伎倆 ○誰か新次官を推せし ○辻久保田二君の評 ○一文部省次官○地方官の流勢○銀林書記官○名文章 ○條約改正最終の覺悟 ○七日の衆議院○和衷協同○其案美ならざるに非ず○井上角五郎」○二君の近狀 ○徒弟夜學校○洪河の源泉は枯葉の下にあり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

# The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 334. DECEMBER 17th. 1892.



EDITORIAL:—A Glance Over the Desert.

CRITICAL NOTES:—"Sin and Punishment." "Kagawa Kageki on Poetry." Mr. Shiga's Geography.

BIOGRAPHY:—Kanpishi, a Chiense Philosopher.

MISCELLANEOUS:—Koran, the Poetess.

CURRENT NEWS:—

FRAGMENTS:—Artists and Writers among the Native Christians.


## 本號（第三百三拾四號）目次


●社說　荒野一望（教育界。經濟界。文學界。宗教界。政治界）

●批評　罪と罰（透谷子評）○大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評（雲峯子）○志賀重昻氏地理學講義

●史傳　韓非子を觀る（天知子）

●雜錄　紅閨詩集を讀む（泣血生）

●摘要　基督教徒中の文學者美術家

●時事　王佐○面白くなし○高利の內國債○千島艦沒○將軍老ひたり○其二○其三○學生の發火演習○福澤先生の義俠○新次官の伎倆○誰か新次官を推せし○辻久保田二君の評○一文部省次官○地方官の流勢○銀林書記官○名文章○條約改正最終の覺悟○○七日の衆議院○和衷協同○其案美ならざるに非ず○井上角五郎○二君の近狀○徒弟夜學校○洪河の源泉は枯葉の下にあり

●片々


## 前週（第三百卅三號）赤表


○社說　宣教師派女學校に一策を獻ず（完結）

○雜錄　婚姻の式のはなし（山下石翁）○今昔ものがたり（お万の方の機轉。節儉と吝。阿部忠秋の慈心。秀吉の心掛。板倉重矩の注意。女のたしなみ。利勝の教誨）

○家政　內治の辨○親戚の會合○家內重寶錄○新工夫シャツ、ツボン下たち方○茶話會（賢不肖の識別。外形と心裏。諺歌。障子紙。銀箔を急に銹さす法。冬日花瓶の水凍らぬ法。櫛に垢のたまらぬ法）○育兒（哺乳の定則）

○兒藍　吾宿の花（若松しづ子）

○摘要　聾啞結婚○若手女記者○婚姻の取締

○時事　高知の怪報○看護術○快よき知らせ○種痘規則改正

○史傳　フランセス、ウイラードの傳

○女報


## 前々週（第三百卅三號）白表


○社說　青年一揆の張本人○道話空漠々たりや○第四議會○河野文部大臣○土佐傳道

○批評　大久保甲東○日本外史と讀史餘論○河村瑞賢○地震家屋○日本建築構造改良法○罪と罰○忍耐の秘訣○第五地理學講議○大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評○武道の發源

○摘要　修身書採定の標準○支店分家出張所○北海道改革○万國赤十字第五集會報告略○自由黨の海軍擴張論○酒精輸入增加○福澤諭吉氏の道法論○現內閣と後藤某

○雜錄　人と國○改革者傳道者○日本改革○眞正の謙遜○義の人愛の人○哀苦の新生○あきらめ○神に對する節操○日本の諺と呂蒙の言○尊敬心○偉人と慕心○人物上の理想○信仰の偉人モーセ○純潔の愛

○時事　伊藤伯傷つく○此老翁可憐○國民政社○新大學總長○漁夫の利○文部省改革○非職郡長自殺○敕任布衣○攻擊と設計○大日本圖書會社の利益○書籍製造的學者○每日新聞の古今佳話

○片々



Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百卅四號 明治二十五年十二月十七日發兌

# 社說

## 荒野一望

眼を放つて、もろ〳〵の方界を豚むれば、歎ずべきものあり、憤ふる可きものあり、竊かに微笑む可きもの亦あり。則はち、筆を執つて一揮し、鬱思積情をもらす。

### ○教育界

文部省の改革は、多分了れりしならん。もし尚ほ有りとせば新次官の椅子の更に動かんとなり。而して、文部省教育の方針に大變動ある可しと思ふこと、亦稀なり。たとひ、千家尊福を新たに用ゆとも、大勢は、介乎たる此小省を動かして、追々保守反動の方より引出すなる可し。徳育の方針なるものの今日より一層僻舊するとは万々ある可らず。國立期成の請願は、本年に行はる可しと思はず。高等中學の廢止説も依然として棄却せらる可し。帝國大學革改案の如きは、固より、一夢に屬し去られんとす。

政府の教育界、大率ね斯の如し。民間私立學校の景況何如んと云ふに、之も亦た新現象あるとなし。たゞ益々其貧乏しゆくを憫れむ可き耳。宣教師派の學校に至りては、改革の機追々に近づくと雖ども、未だ容易すく實行せらる可らず。女學校の景況は既に一般に復興したり。

辻新次君、大日本教育會長を固辭す。之に代るもの果して何人ぞ。其人の何如によりて、多少の變更はある可しと雖ども、要するに、此會は、文部省の附屬物なり。然らずんば、到底目今の姿をすら維持すると能はじ。之に反し、國家教育會は、尚多少の進歩を爲すなる可し。

教育書の飜譯せられたるもの多し、今は既に創考の意見を發表する人の當に現はる可き時期にあらずや。左れど、多年を獻して、人才眞育の道を潛心工夫する如き儕輩、今や甚はだ乏し。教育論の論者はあり、教育者は少なし。教師は多し、先生はあらず。當分、瞻仰すべき巨儒先輩の出現を見るとは至つて難かる可し。

### ○經濟界

最とも、多望なるは、ヘルメス神の領内なり。金利總じて下

り、株劵概して上り、金融獨り寛厚なるに、國庫の餘剩金、大方何事かの爲めに放散せらる可く、鐵道布設は是非とも着手せらる可し。會社の衰へたるものは、稍や生氣を復し、未だ手を着けざりしものは、正に足を進め、而も尙ほ今后多くの新會社の現はるゝを見んとす。

地價修正の議決、果して實行せらる可き乎、極めて疑はし。然れども、其聲によりて、中等地主を滿足せしめたると、既に莫大なり。而して、米作の豐かなると、亦此の影響を大ひにす、經濟界の前途は實に多望なり。

### ○文學界

秋葉散落、四五の結果を遺すと共に、樹躰の太はだ寂然たるは、宛がら、今の文學界の光景に似たり。人物評論、歷史管見の趣味幾分か世に現はれたれど、未だ流行するに至らず、一時は、秋の菌の如かりし小說戯作も、今は大方消え失せたり。之を賞味する人も、既に時季後れの感あらんとす。

文學雜誌を新たに出さんとするもの、近日二三種に超ゆ、此は、流行を追ふにあらずして、流行を挽き回さんとするにあるか、又は自信を隨意に發表せんとするにてある可し。今の文學界は、最早新しき雜誌躰を要めず、寧ろ價値ある書籍を歡迎せんとす。

新文學者の躍起するものあるを聞かず、知名の文士は、追々聲響を減ず。左れど、退隱修養して、大ひに蓄はふるの青年決して少なしとせず。眞に「美」に獻身するの人、稍やく加はる、惟ふに、遠からずして、其山を出るの日あらんとす。

漢詩の流行は、大勢一斑子の謂ふが如くならず。和歌は此上尙ほ着實に進步やすらん。眞詩人の聲は聞かざると依然元の如し。あゝ、眞詩人にして、散文に隱るゝもの少なしとせず。韻聲を以て、腐腸の濁音を響かするもの、古來多し。

### ○宗敎界

神道佛敎の界内には、未だ是と云ふ可き新現象あるを見ず。たま〳〵瞥見片察に係るは、其の痛ましき成行にして、强弩の末、魯縞を穿たざるの歎きあり。基督敎界も、久しく沈滯の姿にてありしが、近頃ろ著るしく目立ちたる新光景三あり、一は、自修鍛練。二は、社會運動。三は、一致聯合と云ふもの是なり。

反譯注入的の信仰は、自から感じて太はだ薄弱なるものなれ

ば、其反動として、批評研究的の信仰に移り、此の信仰、自から冷却して道理に偏し、當初の熱情何處にか失せ行と共に、基督教會を迷ひ出でたる人少なしとせず。然れども、此の試練と淘汰とは、會内を一警一洗するの端緒となり、此よりして、自修鍛練の風新たに起り、今や正に其頂點に達す。而して、常に活火ある人々は、世事の經過、日に益々非なるを見て、慨氣いよ〳〵禁ずる能はず、日本社會を救はんものは、實に眞誠の宗教なりと絶叫して、福音宣傳に勇氣層々切なり。然るに、顧みれば、各宗派内の情弊もはや可なりに鬱結して、中々に容易すく除却しがたく、有爲の志を縛して、自由に運動を爲すことを許さゞれば。寧ろ友を其派内に限らずして、之を其外に求めんとするに至り、尚且つ、社會上の運動の爲めには、各派内の卒先者、相ひ連伴携提するの必要あり叉便利あるを以て、茲に一致聯合の氣運を生じたり。

重厚篤信の人すでに、多少の自修鍛練に得たる所のものあり、今や將に立んとするもの、少なからず。而して、彼の不斷活火の人と、目下時勢の必要とは、之を招ひて、同勞共動せん事を促がす。惟ふに、基督教會内は遠からずして、勃然たる大運動を發現するに至らんか。而して、此回の運動は、殊に根索あり、土盤あり、前途太はだ頼母しく思ふべきものありと觀測す。

### ○政治界

今日の政治界なるものは、殆んど議院界なり。而して、議院界の光景は、之を開會前に比較して、既に一の意外なるものあり。察するに、其閉會前に於て、亦更に他の意外なる事を生ぜしめんとす。

伊藤内閣は、前内閣に優りて、幾多の長所を有せりと思はれたり、實に有し居るに相違ある可らず。然れども、之を議院戰畧の上より觀じ來れば、伊藤内閣、未必らずしも、前内閣に優りて多く所有せざる也。國民派、近江派、東洋自由派の如きは、今に於て、猶ほ前内閣の一分子と縁脈を保つや否や、此の義尙ほ霧中に存すと雖ども、微光照破する所によりて、其の現内閣と縁を遠くせることを認知するは、既に難しとせず。去れば、現内閣は前内閣が得たる味方議員すら今は有せざる也。此の所云る味方なるものは、何事に對するの味方なりしや穿鑿すべからず、唯だ起立擧手を以て算數上に兎角益を

與へたりし味方と云ふを以て足れりとす。然るに、現內閣は今ま、此味方をすら有せず。

思ふに、本年の豫算議決は、十中八九、不成立となる可し。もとより解散斷行の勇氣を生ずることはあるまじと雖ど、今后の經過は、日々に、激烈を加ふるのみなる可し。よし、平穩に結局すとも、決して無事に落着す可らず。兎に角、本年の議會の前途は、見物なる可し。

玆に、一の意外の事を生ぜんと云ふは、會期半ばにして、俄然、政府黨大ひに增加す可しと云ふこと是也。此增加は、生長するによりてか、又は曲造するによりてか、今明らかならず。左れど、要するに、其頭數と手の數とを大ひに增加すべしと案思せらるゝの兆候なきにしもあらず。もし、不幸にして玆に至らば、吾黨は一滴の涙を灑がんとす。故に、豫じめ此事あらんことを希望せず。

議院界外に、政治觀測上、注目す可きほどのものあらず。外交問題依然として元の如し。政論の品種亦因循として從前のまゝ也。

今は、大隈伯最大得意の時節なる可し、今の時は、則はち、尤とも公平、尤とも勇猛、尤とも果斷なる議論を、容赦なく吐くことを得べきの時節なり。伯が、從前の經歷中、今日ほど多く凝望せられ、而も今日ほど重く倚信せらるる時節あらざる可し。

板垣伯も亦た民撰議院建白年代以來の重權を荷ふ、破壞刺激の論法を止めて、建政的の經濟を施こす、伯が長所の爲めに苦慮するものありと雖ども、伯や元來之を好むと云はざるを得ず。

願はくは、板垣伯を以て、總理大臣兼陸軍大臣とし、大隈伯を以て、外務大臣兼大藏大臣とし、副島伯を以て內務大臣とし、氷川の老伯を以て海軍大臣とし、谷干城子を以て宮內大臣とし、近衞公爵を以て文部大臣とし、司法、遞信、農商務の三省に、新才物を用ひんと云ふものあり。一の希望としては、吾黨も亦た之に贊す。

伊藤伯の爲めに、一憂一喜す、取分け、口頭に傷したるは、何かの因緣なしと云ふ可らず、此の千才一遇の時に際して、伯が存分の技倆を見ざるは、恨む可しと雖ども、伯も亦た不思議に多福なりと云ざる可らず、伯は常に親から最難所を避

る耳ならず、其天運も亦之に賛成するが如し。

井上馨君は、今や外務卿たりし以來の大舞台に立てり、惜ひ哉、此舞台は、伯が最長の演舞場にあらず。

後藤伯は至ては、確かに否決と見込たる時の外は、敢て大反對の演説をすら爲すと能はず、三名の東洋自由黨に對して、威を示す類にして止まんのみ。伯によりて、此後、快絶の消息を聞かんとは望まず。

渡邊、陸奥二氏に至りては、例の如く長廣舌を揮ふと多かる可し、然れども、是れ到底第二等の列のみ、大ひに聳耳す可き程のものにあらず。

あゝ、山縣伯、黒田伯、何んぞ吶辨を揮つて、一回眞摯熱情の大演説を爲さゞる。

## 批評

### 罪と罰（内田不知庵譯）　透谷子

沈痛、悲慘、幽悽なる心理的小説「罪と罰」は彼の奇怪なる一大巨人（露西亞）の暗黒なる社界の側面を暴露して餘すところなしと言ふべし。トルストイ、ツルゲチーフ等の名は吾人久しく之を聞けども、ドストイエフスキーの名と著書に至りては吾文界に之を紹介するの功不知庵に多しと言はざる可からず。

露國は政治上に立て世界に雄視すと雖もその版圖の彊大にして軍備の充實せる丈に、民人の幸福は饒ならず、貴族と小民との間に鐵柵の設けらるゝありて、自から不平等を苦叫する平民の聲を起し、壯烈なる剛腸屢ば破天荒の暴圖を企て、シベリアの霜雪をして自然の威嚴を失はしむ。

乳を混ぜざる濃茶を喜び、水を割らざる精酒を飲み、沈鬱にして敢爲、堅く國立の宗教を持し、深く祖先の業を重んず、工業甚だ盛ならざるが故に中等社界の存するところ多くは粗朴なる農民にして、思ひ狹く志確たり。然れども別に社界の大弊根の長く存するありて、壯年有爲の士をして往々にして熱火を踏み焔柱を抱くの苦慘を快とせしむる事あり。佛人の如くに輕佻動き易きにあらず、默念焦慮して毒刄を懷裡に蓄ふるは、實に露人の險惡なる性質なり。

「罪と罰」は實にこの險惡なる性質、苦慘の實況を、一個のヒポコンデリア漢の上に直寫したるものなるべし。ドスト氏



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は躬ら露國平民社界の暗澹たる境遇を實踐したる人なり、而して其述作する所は、凡そ露西亞人の血痕涙痕をこきまぜて、言ふべからざる入神の筆語を以て、虛實兩世界に出入せり。ヒポコンデリア之れいかなる病ぞ。虛弱なる人のみ之を病むべきか、健全なる人之を病む能はざるか、無學之を病まず却つて學問之を引由し、無知之を病まず、知識あるもの之を病む事多し。人生の恨、この病の一大要素ならずんばあらじ。開卷第一に、孤獨幽棲の一少年を紹介し、その冷笑と其怯懦を寫し、更に進んで其昏迷を描く。襤褸を纏ひたる一大學生、大道ひろしと歩るきながら知友の手前に逃げ隱れする段を示す。

高利貸の老婦人、いかにも露西亞は露西亞らしく思はれ、讀者をして再讀するに心を起さしむ。居酒屋に於ける非職官人の懺悔？自負？白狀と極て面白し。その病妻の事を言ひて「所が困つた事にァ身躰が惡く、肺病と來てゐるから僕も殆んど當惑する僕だつて心配でならんから其心配を忘れやうと思つて、つい飲む、飲めば飲むほど心配する。何の事ァねへ態々心配して見たさに飲む樣なもんで一盃が一盃と重なれば心配も重なつて來る」何ぞ醉漢の心中を暴露するの妙なる。更に進んで我妻を説き我娘を談じ、娘が婬賣する事まで、慚色なく吐き出づるに至りては露國の社界亦た驚くべきにあらずや。而して其の再官の事に説き及ぶや、

「又た或時は僕が寢て仕舞つてからカテリーナ、イワーノウナは何だか嬉しくて堪らなくなつたと見えて一週間前に大喧嘩した事ァ忘れちまつてァ………フ………を呼んで咖啡あんぞを馳走しながら荐りに色んな餘計を附けちやァ亭主の自慢をする」

と女性の無邪氣なる輕薄を笑ひ、更に一旦與へたる財貨を少娘の筐中より奪ひて酒亭一場の醉夢に附するの條を説かしめ遂に再び免職になりし事を言ひ。

唯僕が心配でならぬは家内の眼——眼だ。殊に頰が紅を點した樣になつて呼吸が忙しくなる。僕之を見るのが實に辛い。先生は家內と同じ疾のものが挑動つ時の呼吸を聞た事があるかネ。それはそれは堪つたもんじやない。

とその家庭の苦痛を白狀し。遂にこの書の主人公、後に殺人

の罪人なるカ……イ……を伴ひて其僑居に歸るに至る一節極めて面白し。

(五十六頁)人間實にくだらぬもの。と、この病者の吐く言葉の中に大なる哲理あり。下宿屋の下婢が彼を嘲けりて其爲すところなきを責むるや「考へる事を爲すと云ひて田舍娘を驚かし。故郷よりの音信に母と妹との愛情を示して、然どもこの癖漢の冷々たる苦笑を起すのみなる事を示し、實際家を卑しむの念をあらはし、「でなくば生命を捨てんのみ。運命に服從し、百事を放擲し」云々の語を發せしむるに至る。

「必然の惡」を解釋して遊歩場の一少女を點出しかの癖漢の正義を狂欲する情を描き。或は故郷にありしときの温かき夢を見せしめ、又た生活の苦戰場に入りて朋友に一身を談ずる處あり。第六回に至りて始めて。殺人の大罪なるか否かの疑問を飲食店の談柄より引起し、遂に一刹那を浮び出さしめて、この大學生何の仇もなき高利貸を虐殺するに至る。第七回は其綿密なる記事なり。讀去り讀來つて纖細妙微なる筆力まさしくマクベスを融解したるスープの價はあるべし。是にて罪は成立し、第八回以後はその罪によりていかなる「罰」精神的の罰心中の鬼を穿ち出で、益精に益妙なり。余は多言するを好まず。嘗つてユーゴのミゼレハル、銀器を盗む一條を讀みし時に其精緻に驚きし事ありしが、この書載するところ恐らく彼の倫にあらざるべし。余は不知庵がこの書を我文界に紹介したる勇氣をこよなく喜ぶものなり。第二卷の速に出でんとを待つ。

---

## 大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評

(其四)　雲峯子

さらば何故に幼なかれと云ひ、構へてよむ可からずと敎へしか。曰く虛僞(アーテフィシヤル)に陷らんとせしを戒めたるの語のみ。景樹が「歌は誠情の聲也」と云ひ、常に誠實を口に絶たざりし所以のもの、全く虛僞を防ぐの爲めにあらずや。一局部の弊に就て、極端に敎へたる戒を以て、彼は即ち純粹の自然說なりと判斷し來る、豈夫れ正當の判斷ならんや。景樹の靈若地下に之を聞かば、嗚呼何とか云はん。

景樹が其歌論を殘さず、たゞ門人を敎へたる詠草の奧書にのみ、片々の意見を記し置きしが故に、今日彼が所說の如何な

なる點に歸着するかを見る、甚だ難し。時に或は全く自家撞着の如く見ゆ。然れどもさすがは景樹也。仔細に觀察すれば只に矛盾の跡なきのみならず。如何に活眼を有し、人によりて臨機應變の活手段を以て、誠實てふ點に人を導かんとせしかを見るに足る。

人或は云ふ、和歌の道は自然を貴ぶ、他の美術とは自ら異にして、アートを用ゆべからずと。われは然か思はず。歌の道は他の諸道と同じく自ら悟入すべきものなれども、歌をよむの術(或は技、即ちアート)に至つては所謂稽古修練を要する事他の美術と異るなし。是自然にある可けんや。景樹の說も全跡を見れば、即ちアートを排するにあらず。却て上品に調べよと云ひ、姿を得ざる可からずと說きて、アートフルの歌に非ずんば歌にあらずとの意なりしとを知らざる可からず。彼豈然かく自然說を說けりしならんや。

景樹の說已に自然說にあらず。然らば即吟が必らずしも眞の歌なるべしとの結論も不可なり。亦論理上是非共此に至らざるべからざるの理由もなかる可し。彼が歌論の兩面を見ば而して公平の判斷を下さば。

大西氏の云はく「眞心と歌の調べとの間に第三者を要す」と云ふは……即ち詠まんとする主意趣意と歌の言葉の音韻とを、調和せしむる伎倆あるを要す云々と。然り勿論。先に引ける景樹の言を見ば、彼も亦此所謂伎倆を得せしめん爲に、殆んど狂人の如くなりて幾百千の門弟を教たるを知るに足らん。景樹が意を用ひず、又おのづから抔云ひしは、決して之を以て必要あるアートを漠然蔽ひ去らんとせしにあらず、徒らに言語格調の虛僞に流れ、アーティフィシャルに陷るを戒めたる例の藥石なる事明かならずや。

人間は眞に心の徹底より誠實となるを得ば其志す所の道、何事か成らざるべき。われらの要は此誠實に立かへる能はざる事なり。現世に於て誠實の模範ともすべきは何ぞ、曰く無我無心、淸心淨情、天眞自然、なる幼兒のみ。嘗て景樹が人に敎ふの例に之を用ひき、一日彼幼兒を抱て、屋外を望む、偶遠雲の浮ぶあり、時に隣家の屋上、一線の夕烟立つ、之を何ぞと問へば、幼兒曰く雲と烟りと立にける哉と。是れ即はち幼兒が誠實より出でゝ歌となれる也。何人にても眞に誠實を云ふを得ば、何ぞ歌よむ事難からん。此誠實に至らんとし、

天眞に歸らんとする所、即ち修行を要する點也。然れども天眞と云ひ誠實といふを全く智力才能は無用なりとの意と見る可からず。僞飾なき事幼兒の如かれと云ふ也。繪畫彫刻は勿論、凡ての美術及び凡ての技藝に至る迄、心誠實ならずして眞の達人となる可けんや。繪畫彫刻にせよ、詩歌にせよ。先づ修得せんと心づかば、常に己が心に自然に感ずる儘を表はさんとし、アーティフィシャルに陷らざらんことをつとめよ。さらば眞に誠實を表はし得べきに至らば、同時に之を形聲に示すの技倆を得べし。

大西氏の云はく「景樹の實行は全く其歌論と騈馳せしにあらず云々」。此段に至て氏が彼の歌論の一部面を見て評せしこと愈々明かなり。勿論景樹は言語に於ても格調に於ても自由になす可しと說けり。されど彼が「歌は今の言葉もて千種萬態の感想を、千種萬態の調に詠むべし」と云ひしは、俗歌俗謠をも云ひしにあらず。彼の事業は短歌改革に止りしなり。今日より見れば彼が和歌を尙發達せしめて、西洋の詩の如くなす迄に至らざりしは、其功の著大ならざるに似たりと雖も、彼の時代に在て、彼の境遇に於て、彼が爲せし所は、實に比較的に云へば、絕世の大事業なりと云はざる可からず。沙翁、ミルトン、ウオルヅウオルスの徒と雖も、若彼時代に生れ、彼位置に在りせば、よもや彼の上に出るの事業は爲し難かりけらし。人を評するには先づ境遇と時勢とを知るを要す。然らずんば人を誤る事多からん。

第七、俗謠と詩歌。此區別何れの國にか存せざらん、太古單純の時代は兎も角も、人智進み、社會複雜になると同時に言語に雅俗の別あり、人に賢愚智不智あるに至る、自然の事なり。さらば其心を述る詩歌にも自ら雅俗の別を生じ、此に俗謠てふものを要す。然るを大西氏の云はく「彼の歌論よりすれば都々一端歌の如きを凡卑の調なりとて斥ぞくべきにあらず」と。嗚呼景樹は決して斯る主意にて歌道の改革を唱へざりけむものを。西洋諸國とても一般の下等人民迄が、ミルトンチヨーサー等の詩を吟誦し、高潔なる讃美歌を唱ふにあらず、實に卑言野語聞くに堪へざる俗謠を歌ふとす。さらば獨り我國に於てのみ、然かく雅俗の歌を混一にす可けんや。一般人智すゝみて、高尙優美なる調を解するに至らば可なり。今日の下等人民に解せしめんとするは不可なり。豈高尙なる詩歌



Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

と、凡俗野卑なる俗謠と、一致すべけんや。景樹が、けだかく上品にと云ひ、高き姿と云ひ、優美に高尙にと丁寧反復して敎へ置きしは抑も如何なる故ぞ。童子と大人と好む所同じからず。下等社會の存する限りは、暫く彼の趣向に適する俗謠をうたはしめよ、異日文化普きの日、萬民等しく優美の上品のうたを愛するの時至るを待て。

余を以て見れば景樹は短歌の改革を主唱して、亦全力を盡して自ら實行せしと思ふ。彼の歌論を誤解して都々一端歌の作者なる可かりきと論斷す、嗚呼々々何とか云はんや、何とか云はんや。彼の歌論の然らざりし例證多けれど、長きに渡るを以て此に引かず。余は只然らずと斷言し置かんのみ。勿論彼の歌論は短歌に止りしを以て狹隘なりしの譏りは免れざる可し、今後更に歌道の發達を計り、新日本の國詩を起すべきは今後の詩人の責任なり。此事や重大の事業。彼偏癖古陋の古學者、歌人に委すべからず。亦和歌を知らず和學を知らず、凡卑の言語を連ねて新躰詩と思ふの輩に任すべからず。高尙淸潔なる理想を有し、同時に和漢洋の詩を味ひ知るの人にあらずんば能はず。嗚呼、我國に眞詩人を要する切なり、我文學界のチヨーサーなるべきもの果して誰ぞ。我國、詩壇の曉星夫れ何處にかある。

云はんと欲する事多くして未だ盡くさず。更に他日を期して景樹論と國詩論とを公にする事あるべし。

大西氏足下、妄言多謝。十月下旬京都に於て草す。（完）

○第五版地理學講義

志賀重昂氏の著述とす。自から小詩人を以て任ずるの人にして地理學の著あらんとは、蓋し何人も奇しむ所ろなる可し。然れども、此般の著述は、實に氏に取りての最長所と云はざる可らず。其理學と、政治と、察地勢とを兼ね愛するの氣象は、宛かも好く、地理學の講述者たるに適すと云ふ可し。而して、趣味に富める文字と、慷慨的の引例と、所々に詩歌を挿入したる雅懷とを以て、時としては冷粗砂を噛むが如きものと爲りがちなる此種の著書に花を咲かせたり。元來地理學を好かざる族と云へども思はず之を通讀するとを得る也。

○鳳雛と少文林

「鳳雛」は靑年文學と題し、「少文林」は幼年の爲にすと見えたり。同に新らしく第一號を初刊す。

# 史傳

## 韓非子を觀る

天知子

三千年前支那歷史の舞臺に於いて余は豐臣秀吉の一知人を見る、周末多恨の氣血を舐りて群集せる英雄の足跡を冷笑ひ、六國覇王の長袖育ちを一呑にして父祖遺傳の鋭敏なる商人的腦髓を恣まゝにしたる、彼の秦の始皇帝を誰か知らざらんや、固より其品德は半錢の價あるに非ず、好しや儒者を坑に埋めたるの事績を妄なりとするも、行爲往々暴戾殘忍、博浪砂の鐵椎をして趙艮の血氣に餘儀なくせしもの、誠に賛成すべき同感なきに非ず、然れども彼れが巨眼大想の偉腕たるを見るに及んでは、當時比肩すべき者なきの大物たるを賞賛せずんば非ざるなり、土木は萬里の長城と成り前殿阿房の巨殿と成る、子孫は万世を期し、生命は不老不死に至らんと欲す、此巨大の空想家は到底人間世界の定數に滿足するを得ず、只管山神を祠り水神に禱ることを勸め、終に海に神仙を探らしめて相談相手と爲さんとす、其驕傲の眼中には人間世界に心服崇拜すべき者あらざりき、當時勢力ある孔子の道敎を蔑如し、堯舜の妻女を祠りたるを罵りて神聖の氣を蹈破るに至ては、殆んど彼れが胸中の得意なるに愕かずんば非ず、而して此暴漫巨大の癖物をして『アヽ寡人此人と遊ぶことを得ば死すとも恨みず』と心服劇嘆せしめし一人物ありしは抑々何者ぞ。實に韓非其人の他にはあらざりしなり。

韓非は非尋常の學者なりし、其腦髓は深く始皇を驚かせしのみならず、當時碩學の聞えありし李斯をして韓非に及ばずと畏敬せしめ、終に讒殺する程に迄至らしめたり。而して斯く腦髓の人たりしと雖ども手腕の人には非ざりし、之れ後人をして、韓非は具さに諫説の難きを論知して終に自ら脱する能はざりしと冷評せしむるに至りたる所とす。其腦髓は當時流行の策士的腦髓にあらずして學者的なりし、而して純然たる東洋的腦髓なり、何となれば古來東洋的腦髓は漠々たる高遠の理論に入らずして實事實物に思想を練り、實際的にして空想に走るの弊なく、理想的ならず抽象的ならず、偏へに具躰的ならざるなし、而して彼が説く所悉く然らざるものなければなり。之れ韓非が老子を修道の根基と爲せども終に其哲理

を消化するを欲せず、其純正哲學者に成り得ずして『夫れ唯だ争はず、故に天下能く之と争ふなし』との老子の一句すらにも、大反對なる生涯を爲して終に『争』の爲めに一身を滅すに至りぬ、是れ併しながら韓非が最も價値ある所にして又不幸の集合せる所にてありき。

同氣相求め同情相寄る、君子は到底英雄の友に非ず仲間に非ず、時に師たり時に弟子たり、而して君子は到底俠者の胸中を知る可らず英雄は時に之れを知るとあり。韓非は君子に非ず英雄に非ず俠者に非ず、然れども英雄的の學者なりし、故に始皇に相似たる性情少なからざりし、之れ其孤憤の文に一方ならぬ同情を表し、五蠧の書に一方ならぬアドマイアを呈せし所以にして、又始皇が其正反對の長所に嘆服せる所なくんば非ず、韓非が言行一致せよと激勵したる刑名法術の主義は、實行的手腕の始皇に第一の贊成を得て、忽ち歷史上に實行の印跡を殘したるもの實に秦始皇帝の大業なりとす。

然れども韓非は又始皇の火性に薪を加へて苛刻の分子を奬勵せしの失點なきを得ず、凡そ性情意向全く同じき人相伴ふ時は、時に愉快の氣勢を勵まし終に相知らずして其缺點を深淵に相驅るの恐れなきを得ず、始皇に恩惠慈愛の道を説かば耳を掩ふて悦ぶ可らず、然れども其苛酷の分子をして得意ならしめざるのみならず、或は補益するのとなきに非ず、然るに韓非は又始皇に似たる缺點少なからざりし、其大缺點として殆んど忍ぶ可らざるものは、妻子の間も信を置き難たしと斷ぜしむる迄に恩愛を知らざりし冷腸是れ也。彼れは理性的神經質の人なりし、人間を器械物として情と靈とは省みるに遑あらざりしなり、文字あれども文學的に非ず、强健剛快の血成的文字なれども文筆の人に非ず、之れ唯激憤の餘聲に驅られて其吃舌なりしより餘義なくせられたる眞記號なり、故に句々悉く血鳴り氣湧きて憤慨の聲ならざるなし、韓非の名文此點にありて存す。斯くして其身方贔負の性質と負けじ魂の氣力とは、其乾燥せる數學的思想を使役して、常に大煩悶の慷慨心と成り、物凄きまで規矩繩墨に世事を遣つて退けんとの氣組みを現はせしなり、宜なるかな太史公をして、韓子は繩墨を引き事情を切し、是非を明かにして其極、慘礉恩少なしと評せしむるに至りたるとを。

總て人物は棺を蓋ふて後に知らるゝ者なりと雖ども、理想家

と有德家とは重もに生存中に喝采を得る者なり、而して實行的無言の深刻者に至ては生存の當時多く知られざる者とす、殊に裏面的活動の潜勢力者に至ては死後遙かにして始めて非常なる知己を得る者なり、韓非の如きも亦其一か。彼れは當時に知人少なく、誰か能く其人物の胸中に同情を表せし者ありしか、彼れは偉大なる天外の同情者を得ず、神聖の世界に解脱することを得ず、其毒を飮で、寂寥たる人世を振り顧視し時、彼れが胸中の悲慘如何なりしか、刑名法術の經綸大才を抱いで之を施すの場所を與えられず、道を窮めたる甚大の眼を以て、熱心なる改革者たるべき一片の思望を空ふし之れを實行せんとせし社會に離別せんとす、而して向はんとする世界は暗黒なり、彼れが剛腸と雖ども豈寸斷九廻せざるを得んや、唯賴む所のものは千歳の後知己のみなりしならん。

時世能く彼れを活かしたり、然れども時世は又彼れを殺したり、彼れ能く時世に激憤せり然れども又時世に感謝滿足する所ありし、狹小なる激者に非ず時に綏々として餘裕ある寛大の人なりし其『足るを知らざる者の憂は終身解けず故に禍は足るを知らざるより大なるはなし』と言ふに至ては、其悲憤痛激の胸中に自ら餘裕綽々たりしことを見るべし。彼れの説難、難勢の篇等を讀むに於ては、字々世難を穿ちて處世の大才子たるが如し、然れども實は悲憤嘲罵のイヤミを述べたる聲たりしなり、司馬温公説難篇を評して曰へり、非が最も得意の文にして最も失意の因なりと、人皆韓非を現はすに説難の篇に若くものなしとす、然れども彼れがイヤミ的の口調は却て反對の性質を現はしたるものなきに非ず、彼れは『諫説の士は愛憎の主を察して後に之れを説かざる可らず』といふが如き策士的處世の猾才はあらざりき、寧ろ『知の難きに非ず知に處する則ち難し』との如き學者的にして世才的に非ざる所を其本性なりとす。彼れは短氣なる實行者にして即ち直行勇進の改革者なり、其平和沈静の時は頗る熟慮計策するの才智に富みて甚だ用心深き老成家なりと雖ども、一度激動せば急速强行必ず意志を遂げんと熱し、其氣焔は比較的に才智を埋沒消磨して頗る拙策無謀の人たらしむ、然れども滿血無言の一擊は急所を突きて枝葉を省みず『百日食はず以て粱肉を待つも餓者活きず』と言ふの句を吐くが如きは、躍然として其人物を視るが如し。然れども彼れは到底政治家たるを得ず、寧

ろ立法官たるを得るも行政官たる可らず、否恐くは建設者に非ずして警醒者たるべし、彼れ若し李斯に代りて始皇の臣たるを得るか、恐くは儒者が政治家と成りたる商君の類ひたるべし、唯大に高仰して推尊すべきものは、彼れが道を練りたる人物なるを以ての故なりし。

書の味ひは道の書たるべく、人物の味ひは道の人たるにあり、徒然草、韓非の書幷せて之れを讀むに言ふ可らざる同味の舌に觸るゝものあり、韓非は又兼好と同鍋の臭味なきを得ず、一は世外に嘘して幽玄涼味、恰も人類の心情を抜き來りたる如く、一は世上に呴して痛激酸味、恰も人類の意志を曝し出すが如し。共に多感多情にして道に泣きしと雖ども、一は情を以て人世を廣く嘲りて哀しみ泣き、一は氣慨もて人世を狭く罵りて口惜泣きせり。其人世に發顯する所固より黒と白との如しと雖ども、素是れ圓滿の一人間が二裂したるの半身のみ、一は戀想に狂して情の堂奥を極め、一は非政に狂して憤慨の根底を究む、趣き同じからずと雖ども、韓子をして彼の境遇のまゝ永存せしむるを得ば、失意の極、終には共に手を握りて同處に泣くの人たるやしるべきなり。共に文筆の妙を以て一世に鳴り而かも肺腑血涙の餘滴を以て成る、而して兼好は佛道に思想を養ひしと多しと雖ども、死する迄自筆の老子を愛好して、韓子と共に黄老の道を味ひし同門の弟子たりしも亦奇遇ならずや。想念沈みて靜かに二人の胸底に耳を澄す毎に、人世誠に慘酷無殘なるを悲しむ、當時人世に大知己を得ず共に時世の不調子に逢ふ、憾み千歳に深しと雖ども其不遇の失意は即ち其人を致したる所以を思へば、願くは國見山麓草廬の人、秦境非謗囚牢の人、共に憾むる所なからんか。

# 雜録

## 紅蘭詩集を讀む（上）

攝洲神戸　泣血生

紅蘭小集二卷は、近世の詩人梁川星巖の室、日本のブラウニング夫人、張景婉（文化元年甲子に生れ明治十二年三月歿す）の著はす所にして詠物、述懐、遊覽、雜興の詩一百三十餘首を收む、頃日百忙中に少閑を得て之れを讀むに、別に雄作大篇と稱する程にあらずと

雖、悉く皆錦心麗句に非ざるは無く「命意窈眇措辭渾厚」巾幗詩人一世の理想、感慨、性情を發露し盡くして餘薀なきが如し。余や不幸、詩文を見るの才に乏しと雖、讀過流覽の際、豈に此慕ふ可き一個閨秀の人と爲りを看取せざらむや、假令孟浪杜撰なるにもせよ。請ふ試みに渠の人物一斑を語らん。

惟ふに、紅蘭は其氣韻自ら高尙にして、淸楚純潔を愛せし婦人なるべし、豪華美麗を好まずして、瀟洒澹泊を好みし婦人なるべし。然ればにや、渠は詠物の詩に於て、桃李よりは幽蘭を愛し、牡丹よりは寧しろ紅蓮を好めり。而して梅の淸標、竹の勁直、菊の隱逸、是れ皆渠の愛賞して措く能はざる所なりき、其野菊を詠ずる詩に曰く、

金葩臨澗照幽潺夕露晨霜太苦艱自是貞心能樹立不勞勁竹更援扳後時氣味逾馨烈離俗容姿信麗嫺遲暮耐寒吾亦敢風前相對覽開顏

何ぞ其韻致の太だ高くして脫俗なるや。

紅蘭の趣味已でに浮華輕薄を厭ふ。故に渠は又た當時女流の熱心なる慷慨家なりし也。蓋し當時恰も德川氏の季世、天下泰平の極度に達し、奢靡の弊風滔々として上下に行はれ、特に婦女の如きは、其常を守らず、飽食逸居、徒らに容貌形骸の美を粧はんと欲し、又た名節廉恥も顧みず。紅蘭實に此時に出で、慨然として歌ふらく、

買錦市珠靡重貲高堂奉養自然疎妻孥能減閨裝半甘旨朝昏供有餘

貧姑也抵富家娘壓髻梳笄璫珥光不見古時風俗美內人首飾倘黃楊

而して其東叡山に花を看ては乃ち、

惟擧一隅堪見費衣皆羅縠食皆珍但致風氣歸淸儉未害歡呼共醉春

と吟じ、田舍に養蠶を見ては、

可歎後世多虛職不織而衣不耕食生小敎得歌舞成只重聲色不貴德陳粉園香闘合歡繁絃嬌吹淸夜闌豈知田舍女工若機聲軋軋北風寒

と詠ずるが如き、何ぞ其太平の風俗偏へに豪奢に流れ、浮華を競ひ、實業を輕んじ、徒食暖衣、婦女の常を守るなきを慨歎するの切甚なるや。

紅蘭の氣慨大抵此の如し、然れども渠は決して情なく涙なく、

粗暴にして殆ど今日の女壯士に類する殺風景極まる婦人には非ずして、眞に優さしくして且つ愛情濃やかなる女らしき婦人なりし、特に巾幗詩人として渠に取る可き所は、渠が家鄉を懷かしく思ふの情、乃ちファミリー、アフエクションに富めることなり、凡そ渠の詩を讀む者は、何人も渠がホームの詩人たるを拒まざらむ。率渠の詩を引ひて余が言の妄ならざるを證せん。夢得卿書の詩に曰く、

夢中接得家中信、說盡別來無限情、醒後却添惆悵事、平安兩字不分明、

何ぞ其詩趣の女らしくして懷鄉の思切なるや、又た西征千里更西征、途次筑前矜萱の關を過ぎ、關外溪水の流るゝ音を聞きては似聞阿爺喚兒聲と驚き、旅中春に逢ふては不覺に故鄉の思はれて

紅事闌珊綠事新、每因時節淚霑巾、遙知櫻筍登厨處、姉妹團欒少一人、

と口吟み、春盡きては、

阿母已亡餘父親、孤燈細雨夢歸頻、關山春盡無消息、杜宇啼來驚殺人、

と述懷し、天涯覊旅の客、端なく除夕を迎へては、

思歸三歲未能歸、紅燭依微照暝幃、憶得東風舊粧閣、姉呼妹喚整春衣、

と昔を忍ぶが如き、如何にも懷鄉の情切なりしを想見するに足る。其還家作に曰く、

行行村落滑蛙黽鬪春田老農肝旦衡望我來拜前賀歸言絮情意信可憐殘寒雨稍霽夕照在柴關上堂未交語擧家涕淚先驚定方生喜談笑正呰然

決決籬外水荒荒階下苔跡稀撫亦足約僮矜草栞殘花雖晼晚亦可行一盃團欒多情話骨肉洵樂哉常時豈不樂未見以逭回天涯五年客一旦忽歸來

何等の妙筆ぞ、何等の彩筆ぞ、嗚呼此の數詩を讀むもの誰か渠がホームを愛し、姉妹を愛し、隣人を愛するの詩人たるを知らざらんや。抑そもホームは巾幗詩人獨占の王國なり、故に渠はホームの理想を高かめ、ホームの生命を淸よめ、ホームの快樂を歌ふを以て畢生の天職とせざるべからず。蓋し紅蘭の如きは巾幗詩人として能く其の天職を全たうしたるもの乎。



Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

# 摘要

## ○基督教徒中の文學美術家

福音新報第九十一號に載する所、左の如し

**彫像家**
大熊氏廣氏　藤田文藏氏　菊池鑄太郎氏　村上捨二郎氏
靑山武一郎氏　井田道壽氏

**繪畫家**
下岡蓮杖氏　靑木金太郎氏　林　蒼氏　上杉熊松氏
藤　雅三氏　米津菱江氏　秦　金石氏　中川堅一氏
井上直子　八木兼辰氏　熊谷直彥氏　石川吳山氏

**詩人**
奥野昌綱氏　井上活泉氏　池袋清風氏　湯淺吉郎氏
磯貝雲峰氏　北村透谷氏　久野白菊氏　湯谷紫苑氏
松山高吉氏　高木敝日氏　三輪長行氏　津田白雲氏
熊野享堂氏　土居香國氏　中島湘烟氏

**小說家**
宮崎湖處子氏　三浦　徹氏　巖本かし子　須藤松琴氏
三宅靑軒氏

**著譯家**
巖本善治氏　嶋田三郎氏　井深梶之助氏　松村介石氏
横井時雄氏　小崎弘道氏　瀨川　淺氏　田村直臣氏
高橋五郎氏　原田　助氏　浮田和民氏　木村駿吉氏
內村鑑三氏　久保田富次郎氏　宮川經輝氏　山路彌吉氏
竹越與三郎氏　村田　勤氏　增野悅興氏　津田　仙氏
和田垣謙三氏　平岩愃保氏　松島　剛氏　今井壽道氏
水野　功氏　櫻井近子　田川大吉郎氏　大石　保氏
坂本直寬氏　細川　瀏氏　成瀨仁藏氏　望月與三郎氏
杉山重義氏　綱島佳吉氏　三並　良氏　丸山通一氏
櫻井成明氏　赤司繁太郞氏　鈴木才三氏　松浦政泰氏
小池靖一氏　淺井　柞子　星野光多氏

詩人に戸川殘花氏を欠き、著譯家に植村正久氏を欠きたるは、福音新報が記す所なれば也。

# 時事

## ○王佐

試みに、國務大臣が議院に於ける辨論を聽けよ、何んぞ輕ろくして自重せざるとの太甚しき。身、王佐を以て任ずるの大臣ありや

## ○面白くなし

新聞は單調子となりぬ。夫れ、日本は議院のみか。

## ○高利の內國債

第十五銀行に、一千万圓の征討費借入金を拂戾し、國庫を高利にて枯すまじとの、自由黨の出案は頗ぶる好し。たとひ、是れ議院に於て議すべき權外にありとするも、一國の立法府に於て其衆議を集め、之を內閣に勸告するは、太はだ好し。如此き好例の現はれんとするは祝す可きと也。

## ○千島艦沈沒

深く之を悼む。何如にして衝突せしか、速かに交渉裁判を開かざる可らず。之に先だちて、早く我海軍の技拙かりしと歎ぜんとするものは、邦家の爲めに思慮する淺きにあらずや。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たとひ、我が技長ずともラペンナ號にして拙なくば之を何如にすべき。沒死者の遺族の爲めに、九死得一生の生存者の爲に、邦家の榮譽の爲めに、吾黨は千島鑑の最后に至る迄で其道を盡せしとを信ぜんと欲す。

○將軍老ひたり

地價修正、三税增課の出案に對し、先づ感心す可きは、政府が常日に至る迄で、よく其秘密を保ち得たるとにあり。不意に之を示して、人意を驚ろかし、大ひに民心を收攬せんとしたるともある可し。然れども、三税を增加して、地價を修正する如きは、苟くも眞に當今の時務を知るもの丶爲す所ならんや。政府、其勢を察せず、其理を辨ぜず、因循として固息の策を立て、以て奇に誇らんと欲す。あ丶、大臣諸君、久しく太平に狃れて、戰陣の機敏を失なへり。

○其二

地主に驅られて地價修正に躍起したる面々は、此回、本志を露はして、地價修正を否むの口實を得たり。彼等は言はんとす、吾黨は三税を增加するとに不同意なり、地價修正案に同意せんとするも得ずと。政府は玆に於て、實に謀の裏を搔れたり。

○其三

政府は、地價修正に同意せり。然らば、三税を增加せず、政費を減ずるの結果に於て、此案を實行せしめんと。豫算節減論者、非政府黨人は、結搆なる糧を得たり。政府は玆に於て虻と蜂とを取れり。

○學生の發火演習

東軍の大隊長大沼浮藏。西軍の大隊長小池常宗。統監木下廣次。審判官、松村少佐、倉山大尉、佐藤少尉。時に、明治廿五年十月三十日より十一月二日に至る三日間、武藏國北多摩郡府中驛近傍に、第六回發火演習を擧行す、とは、第一高等中學校校友會雜誌第廿一號に掲載する演習記事の眼目なり。學校の運動には面白き趣向と云ふべし。勇士の組打と題する條に云く、

是は同時の事なり、東軍の一隊は常久村の西端にて敵の斥候と衝突し、其一人を捕へて白帽を奪ひ尚も潛みて敵狀を窺ふに、敵の將校斥候に遇ひければ、東軍の一人は以前奪ひ白帽を戴き、敵の步哨に擬して「止まれ」と吒叱し「問

語に進め」と令せしに、彼隊の前方に進みし一人は給かれて「時政」と答へぬ、更に「答語に進め」と呼びしかば怪しと思ひけむ答語とは何ぞ、余は小隊長某なりといふ、此方は是非共答語を言はせんとし、彼は答へざらんとし、兩者押問答の最中に、西軍の人々等は某一人を殘して何れへか逃れ去りしかは、此方は堪へ兼て、余は東軍の中隊長梶原なりと名乘り躍りかゝりて無手と組み、組みながら倒れて互に揉合ふ處に東軍の兵士どもは助勢せんとて立掛りしも、一寸先も譯らぬ暗夜なりければ敵と味方を分ち兼ね上か下かと呼びかけて暫し形勢を窺ひしに、梶原は早や敵を組伏せて難なく敵の帽子を奪ひぬ、石橋山の夜戰今更の樣に思出されて面白かりき。

○福澤先生の義侠

福澤翁が義侠や、世に聞えんとするを祝す。翁は此度び、北里醫學博士の爲に、芝公園内に、傳染病研究所を建たり。

○高等商業學校

高等商業學校の卒業式に於て、商海の雄、澁澤榮一氏は、初めに、日本現時の商業を慨し、終に實業と學問と更に密着すべきことを說けり、云く、

吾は從來工學或は理學の得業者に事件を委任して案外に不結果を生じたること多し爲に失敗損失せしは枚擧に遑あらざるなり。……本校の學生を養成するに付ては、躰面を整へんよりは寧ろ眞實に物を貫くと云ふ念を強く持たしめんと欲す……諸君は飽迄も商人として高尚なる氣位を持ち勇壯に活潑に邁進の氣象を存し而も片時も恭順の心を失せずして所云る孝悌忠信ならんことを望む也。……之を要するに學校の教育は何處までも事實を貫ぬくべく又目的を專にするやうに教ゆ可し而して學ぶ人も亦平生修める課程の外に猶ほ孝悌忠信を以て百折撓まぬ剛毅の氣象を以て之を修めば果して十分の人を得べし。今ま文部大臣並に總理大臣の祝詞中に商業は國の重もなる要務なりとありしも予は更に一步を進めて例へば大軍艦あり又大々砲あるも船又は大砲の音のみにて直に國强しと云ふ可らず必竟其音に代るの實力無くんばあらず而して其實力は誰に依て生ずるやと云はゞ即はち商人の力なりと云はん果して然らば我々は國家富强の要素なり此要素たる吾人商人豈に充分の覺悟無くして可ならんや。

剛强自忍の氣象鬱勃たりと云ふ可く、而して此の福音は實に高等商業學校の書生の尤とも服膺す可きものならん。

○新次官の技倆

「日本」の記す所によれば、久保田讓氏は、受任の即日、急使を派して直轄學校長に新任の披露を爲し、翌日直ちに高等官食堂の改良に着手し、急に私邸に電話を架せしめ、書類の傳送は屬官を用ゆることに改ためたりと。而して評すらく「敏腕」

○誰か新次官を推せし

此事を記するに、一の權利を有する「教育報知」は、辻文部次官辭職の心事と題する文中、左の一句を掲ぐ、

又彼の一二の新聞紙上、予が自から後任者を薦めしなど記しあれども、是れ亦全くあとかたも無き說なり、予とても全く其邊の考へなきにもあらねど、上機慧なる主務大臣の在るあり、下敏腕なる各局長諸氏の在るあり、此際予の殊に冗言を進むるの必要もあらざれば、毫も政機の上に關して申し出せしなどのあることなし。

○辻久保田二君の評

教育上の雜誌には、第一に「教育時論」を推さゞるを得ず。殊に、文部省に關する其記事の剛直公平を得るは、既に定論ありとす。近號に「嗚呼文部の近事」と題する一篇ありて、中に云へらく、

我等は辻君を知る、其誠實にして職を奉ずると勤勉なるを知る、襟懐寬弘にして包容の量に富み、能く奇才異能の士を求めて之を幕下に致すの材能あるを知る、虛懐にして人の言を容るゝと敏なるとを知る、七八年前の辻君は我得て之を知らずと雖も今日の辻君は事を處する頗ぶる公平なりしを知る……君の位置に異論を挾はさむ者の出で來れる所以は、單に君が世俗の才子にして學問上の才子に非ず、一個の紳士として完全無欠なるも七万の教育家が仰瞻す可き道德上の模型として完全無欠ならざりしに在る耳。……然れ共辻君が其職を退きて久保田君が之に代るに至ては、是果して何等の意義ぞ。……未だ久保田君の德は辻君の德に優りしとを聞かず、辻君の誠實と眞率とは世人の之を稱揚するを聞きたれども、未だ久保田君の誠實と眞率とが世人の耳に入りたるを聞かず、哲學家として教育家として若くは道德家として世人の仰瞻す可き資望に富むと久保田君が辻君の右に在りしと云ふとを聞かず。久保田君の技能として世に聞ゆる所は世俗の吏才のみ、算を執て大臣の官邸を評價し、帳簿を作つて官有の地所を拂下げ人をして其後に議するを能はざらしむるの技能は我等實に久保田君に恐服す、然れ共此技能は未必らずしも教育家の應に仰瞻す可き資格と云ふ可らず。

斯て、文部次官となす可き人は、西村茂樹、細川潤次郎の如き人々なる可しと案指したり。

○一文部省次官

一省次官の變更何んぞ注目するに足らん、今の政府にして、一次官を變更すとも、遂に何事をか爲さんや。然るに、吾黨が文部省次官の異動に付きて、かく複論する者は、此省、他の省と異なり、邦家の長計に關すると尤とも大なれば也。

○地方官の流勢

埼玉縣會は中止せられたれども、遂に其知事は更迭したり。三重縣會も亦た去二日に中止せられ、德島縣會は知事及書記官の信任欠乏を議決し、愛知縣會は、知事の怠慢を議決せん



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

とて、之に出席を求め、面前に於て滿場一致の可決を爲したり。あゝ、地官に良二千石なきか何如ん、近來の形況大抵此如し。

○銀林書記官

東京府會開けてよりの番外說明員銀林書記官今回出で丶埼玉縣知事となる。府會は其功績を議事錄に特筆し、且つ任地埼玉縣へも其表彰狀を送ることに議決したり。東京府の爲には弔すべしと云へども、吾に富田知事のあるあり、彼れ埼玉の爲めに祝せざる可らず。

○名文章

其勇なきは笑ふに堪へ、其巧みあるは賞むるに足り、其文章の妙なるは感ずるに餘りあり。之を、井上臨時總理大臣が、河野廣中氏の挑戰(シャーレンヂ)を拒みたるの答書とす、

二十五年十二月三日及五日の通牒に於て貴院は國務大臣の出席を請求せられたり國務大臣は何時にても各議院に出席するの權を有するが故に其出席の爲めに特に貴院の請求を煩はすを要せず此段及覆牒候也

明治二十五年十二月七日

內閣總理大臣臨時代理內務大臣　井上　馨

衆議院長　星　亨　殿

○條約改正最終の覺悟

條約改正上奏案の文に云く、抑そも國家の統治權は天皇の總攬し給ふ所苟くも之を侵蝕す其條約は一日も存す可らず各國若し我に向て對等條約の締結を拒まば我は時限を刻して我現行條約の廢棄を布告するの止を得ざるを信ずる也と。此の一事、眞ことに條約改正を論ずる輩の最終に覺悟すべきものとす。苟くも此の一決意を欠かば、對等條約の事決して放言す可らざる也。竊かに掛念す、此上奏案提出の議員諸氏は胸裏實に此の堅確なる決心と、聰慧なる識見とを有するや何如に。もし單に政府を苦しむるの策として、暫らく無責任の壯語を放つとせば、國家に不良、陛下に不忠、之より太甚しきものはあらじ。

○七日の衆議院

河野廣中氏が、議事日程變更の動議を提出する時、安くんぞ政府が之に迄で不同意を表するの面白味無きことを察せんや。左れど、井上大臣が五縣水害土木費追加豫算の演說に關係せしめ、押切りて其所志を大發するの融通を爲さゞりしは少しく遺憾なれ。左るにても、政府は議院戰法に慣れざることの甚しき哉。其元帥たるもの、顔然に議事規則を繰り反へし、書

記官に質問し、稍やく以て不同意を決答す。彼輩をして、議院に悪例を造らしめずとの見識より此決答を爲すの慨あらしめば、總理たるもの直ちに一片紙に記して「不同意」と答ふ可りし也。あゝ、政府稍やく、之を斥けて而も勢威上には後れを取りぬ。河野氏未だ述べず、議院未だ之を賛否せず、而して勢威上の勝利を得たり。たとひ、河野氏をして演說せしめたりとも、何程の事かあらん。傳ふるもの云く、彼は撰擧干渉善後策と、海軍部內整理の事を演べんとせし也と。

〇和衷協同

翌る八日、嶋田三郎氏は、「政府の覆牒に對し院議を明にするの緊急動議」を提出し、立法行政兩部の和衷協同せざるものは其責內閣に在りて議會に在らざるとを天下に明らかにせんと論じ、大多數を以て可決せられたり。

〇其案美ならざるに非す

六日の「北海道開拓計畫預算に關する建議案」八日の「監獄費國庫支辨法案」。同日の「內閣信任欠乏の緊急動議」等皆否決せられたり。國利は黨利と伴なはざれば行はれず、洒然として黨僻を脱するの國士は、もとより容易に求む可きにあらず。願くは、此等の議案、速かに、最大政黨の手によりて出でんとを。

〇井上角五郎

果して、對韓策の質問を發したり。彼が政府に對するの掛引、擒縱變幻、得て測知す可らず。而して、常に一奇才たるとを失なはず。後藤と彼との才をして、若し邦家の正路に轉用せしめば、見る可きもの多からんに。深く之を惜しまざるを得ず。

〇二君の近狀

西郷從道伯は、去る日、國民派の代議士七十餘名を芝紅葉館に招待し、演說すらく、

去る一日政府より提出したる法案に就き諸君が直ちに其方針を定めて發表したるは感服の至に堪へず諸君は實に國家の柱石なり。

品川子は、代々木村の念佛庵に於て、咏ずらく

世の中にたのむは己が心ぞと
しりつゝなげく身を如何にせん。

〇徒弟夜學校

勞働問題に關係淺からぬ、佐久間貞一氏は、徒弟夜學校設立



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の計畫を發表せり。其法方は、三年間毎年七千五百圓宛募集し、之を十五區に分ち、一區に五百圓宛目的を明示して寄托し、教授法は高等商業學校職工學校東京府教育會大日本教育會國家教育社等の協贊を求め。而して三ヶ年間實地に經驗し奏功ありさせば各學區會之を負擔するに至らんことを望み、學校は各區の公立小學校を選びて用ゆ。好き計畫と云ふべし。

○洪河の源泉は枯葉の下にあり

青年基督信徒共勵會の創立者、博士、エフ、イ、クラーク氏來り、大ひに勵説せらる。其所説の一に云く、

余は屢々最初の基督信徒共勵會が世に起りたる事情に付て人より尋問を受ることあり、抑も此會も亦た現今教會に於ける多くの運動と齊しく初は唯だ誠に微々たる者にして敢て教會の長老輩が集つて之を制定せしにも非れば又教會の會議に於て年少者の爲め如此き運動を試むるの時期已に到達せりと宣布せしにも非ず唯其時已に熟したるが故にいと平靜に且つ質素に世に生れ出たるのみ今之を他の大ひなる事業に比較するは少しく早きに過たるが如しと雖ども此一點に於ては共勵會は彼日曜學校外國傳道青年會等に於て異なる所なし蓋し此等は皆な人の思はざる間に成りたる者なり試みに思へロポート、レーキ（日曜學校創立者）がブローセストルの貧兒に温かなる甘藷を與へたるウイリアム、ケレー（近世外國傳道率先者の一人）が異教の民に福音を傳ふるの許可を教會の長老に請たる、ジョーヂ、ウイリアムス（青年會の主唱者）が初めて青年の爲に集會を催ふしたる皆當時世人の注意を惹きし者に非ず、又誰も如此き微々たる事よりして如此き遠大なる結果あるべしとは夢にだに之を視ざりしとならん。

元來此會を立て此事業を進むることに付て人の材智を用ひたることは誠に少し然るは如此く非常なる迅速の增加は他人の之れを視て不思議に思ふ如く其創立以來最とも密接に此事業に關係したる者にも殆んど不思議に堪へざる程なり實に是は計畫したる者にあらず又先見あつて爲したるにもあらず。

惣じて大事業の起元は、常に此に類す。而して此類の大事業の發起者たる人は、后に至る迄で如此く感覺し紀念し敍述することを得るの人なりとす。

# 片々

可愛子編

●少年共勵會　今度來遊せられたるクラーク氏の主唱に成りたる會は、譯語區々にて定まらざりしが、有志者の協議を經て、愈々少年共勵會と譯するとに決したり、クラーク氏は去月三十日夜、本郷中央會堂に於て、本月四日午前十時より中六番町會堂に於て、午後七時より芝愛宕下の芝區會堂に於て、演說せられたり。

●東京專門學校靑年會　は其起原明治二十年の春頃にあり、在校生にて基督教信者なる木暮仙太郞、末兼八百吉（宮崎八百吉）氏等十四五名の發起に係る、是基督教靑年會の起原なり、此會の爲しつゝある事業は、每月一回講談會を開き、有名なる牧師教師に來席を乞ひ、宗教上神學上の意見を叩き、相互の意見を吐露し、一方には眞理上の知識を養成し、一方には相互の親睦を計り、或は學校講會に於て辯士を聘し、基督教演說會を開き、在校生徒をして基督教の眞理を知らしむる等にて、目下の會員は得業生及び現在學生を合せ五六十名にて、內每會出席者二十餘名に過ぎずといふ。

●上毛靑年會　の趣意書、主義、目的は左の如し、

趣意書

曰く正を踐で懼るゝ莫れ、曰く義を取り仁を爲す、嗚呼正義は實に人生の大道天地に亘り古今を通じて變易すべからざるの綱紀也、吾上毛靑年會の始めて社會に立つや首として主義を此に執り、終始一貫以て渝るとなきを盟ひ、爾來幾多の歲月を經過し多少の艱難を甞歷したりと雖ども、這の主義に至ては屹然動かず、常に疾風勁草の苦節を操守せり、主義既に斯の如し其目的とする所又從つて純淸潔白ならざるべからず、夫の廢娼を唱道し社會改良に盡力せる如き固より其所なり、然りと雖ども人を正さんと欲せば先づ已れを正うするを要す是を以て吾人は正義を各自の躬行に匡だし而して後ち彼の穢醜汚濁、世教を紊亂し、人道を敗壞するものゝ勦絶を圖らんと欲するなり請ふ世の吾人と主義目的を同うするものは來て倶に力を効す所あれ

主義

一正義

目的

一智識を交換し友誼を厚うするとを期す
一全國の廢娼を期す
一社會の惡風を矯正するを期す

●津市基督教靑年會の計畫　三重縣津市の基督教靑年會々員は、津市に一の倶樂部を設立し、演說談話の用に供し、又別に書籍室を設立せんとて、目下奔走中。

●土佐靑年會　同會は土佐教會內に在り、去月十二日の夜、同教會に於て第二回の總會を開き、併せて其會員が平生僅少の時間を儉約して勤勞したる手製品の販賣を爲したり、彼輩は學校の教課後陸續馳せ集まりて各自開會の準備をなし已に其時間に至りては平生習得したる學術道德等の談、或は克己助他の實驗を演べ、最後に牧師杉浦氏より、會員幷に來會者に對し有益なる勸話あり、終て販賣會を開けり、品物は毛糸編物、カードの繪本、塵掃等にて、賣收金高殆んど二圓に達せり、抑も之が爲めに勞したる時日と云へば僅に三ヶ月中土曜日に學校を終りてよりの事なるが故、固より大金を得る能はざるは勿論の事なり、不取敢其內一圓を岡山孤兒院に義捐せり、同會は今春三月の末杉浦夫人の持論を實行し、始めて三才以上十五才以下の少年男女を以て起りし者なりとぞ。

## ●山梨縣通信

◎山梨廢娼義會の建議　同會員は去る七日、新海榮太郞、勝格彌二氏を惣代として、縣會議長木內信春氏に面し、廢娼建議書を差出したり、又各議員へは、女學雜誌社發兌の廢娼演說（植木枝盛、嶋田三郞兩氏の廢娼演說を筆記せしもの）を配附せり。

## ●巖手縣通信

◎盛岡に於ける廢娼運動　小野坦氏等、同地に於て熱心に運動したり、訪問せし縣會議員二十餘名にして、多くは贊成を表し、或は勘考すべしと約せり、たゞ不幸にも都合上手續上、行違ひを生じて、議場に廢娼建議の上るを見ざりし。

## ●群馬縣通信

◎上毛廢娼の景況　上毛各靑年團躰は、本年秋期聯合大會の砌、帝國議會開會の曉には、又々例年の如く日本全國の廢娼を帝國議會に出願するの決議を爲せし由なりしが、時機到來せりと、先頃より夜を日について奔走し居る由、中にも上毛靑年會の如きは、縣會開會以來一々議員を訪問し、其意見を叩き、最早殆んど議員過半數の調印も濟み、有志者の分も出來上りたれば、不日貴衆兩院へ請願書提出の運に至るべしと云ふ、而して一方妓樓及存娼家の狀を見るに、縣內妓樓も愈々明治二十六年十二月限り悉皆廢滅に至るべく、其命數も僅々一ヶ年の短日月に切迫せしを以て、失望の餘追々廢業するもありて、何れの妓樓も內々大に氣をみ始め、目下陸續前橋市中に出入し、例の黃白の魔力を賴み、或は縣會議員にすがりて哀を請ひ、或は壯士を仕用して何がな爲さんとするも、壯士の如きは徒らに飮み料を貪るのみにて何の功能もなさず、議員とて或るものは前きに熱心なる存娼家のものさへ議決を重じて中々動がざるものあり、或は輿論の大勢には到底抗すべからざるものと思ひけるにや、どうせだめなりと少しも受付るものとてはなく、數日前板鼻外一ヶ所より存娼の建議書樣のもの持出せしも、議長にはれ付けられ、ほう〳〵の躰にて引込みたる由笑止の事にこそ。

尤も最肅なる、職業なりとす。フレーベルは、これに同ず。然ども、遊戯に善悪あると、事業に善悪あるに異らず、若し能く之を制裁支配せずんば反て悪しきに走らんとす。こゝに於てか、幼稚園の管理を生ず。

(四)、左れば、恩物(ギフト)と稱する様々の形の品物を之に給し、之を以て自ら遊戯せしむ。その遊戯は即はち自ら想考する所に從て職業を爲すなり。恩物には最初球を與ふ、球は調和の躰なればなり。之に種々の色を集む、以て視力を發達せしめんとす也。

(五)、遊戯に音樂を交へ、いよ〳〵樂しましむ、之に談話して自ら智性を開發せしむ。左れど、その談話は談話たる可し、講義の如くなる可らず。凡そ、智識は直覺的を最上とし、研究脩學の躰に入らざるを善しとす。故に幼兒に談話するときは自らにして悟り、自らにして樂ましむべし、決して苦學研究せしむることある可らず、とは云ふ。

(六)、「フレーベル」が新教育の精神を約すれば、大率れ左の如し。幼稚園に對する事の原理も亦その中にあり。

一、凡そ學問は其の人の能力を開發する度の多少によりて價を増減す、而してこの能力の開發は自活動にあらずんばあらず。

二、凡て記憶の力を使用するときは、更に高尚なる他の心力を使用するが爲の伴随たらざる可らず。

三、如何なる學科を教ゆる時も、その學科は、學生現在の必要に適應すべし、未來の時期の爲めに預じめ教ゆることある可らず。

四、天然、近世文學、近代言語等を學ぶに、用ゆる時間は、總て過去に屬するものを學ぶに用ゆる時間よりも多かる可し。

五、教育とは心を教育すると共に併て身躰を教育せざる可らず。

六、その手、その目を使用せしむべき教育は、富める人の子も、貧しき人の子も同様にてある可し。

七、女子の高等教育は、男子に於けると同様の注意掛念を受べし。

八、教師も亦た醫者の如し、必らずその職業上の脩錬を得ざる可らず。

九、總ての學科上の法則は皆な學術上の基礎より發す可し。即はち夫々關係の事物の相當の法則の上に基ひせざる可らず。

右主としてロバート、ヘベルト、クイック氏の說要による。

(七)、グレアード氏嘗て「フレーベル」氏の教育法を研究し其要領を極めて巧みに概括したりき。其言に云く。

○幼兒に緊要なる三の天性あり。

一は觀察上の趣好

幼兒の官覺は、總て鋭敏なり、其手其目に觸るゝものは、何者にても能く之をして樂しましめ之をして注念せしむ。

二は結搆を好み、活動を要す、

幼兒は、只だ物品を示さるゝのみにて滿足せず、必らず之に觸れ、之を執り、之を其自己の所有と爲さずんば滿足せず、而して之を以て其思ふまゝに結搆組織せんことを試む、彼は自らなる幾何學者なり、自らなる器機師なり。

三は獨自一己(パーソナリテー)の感覺、

幼兒は自己の持場、自己の仕事、自己の教師を所有せんことを欲す。

○幼兒に以上三の緊要なる天性あり。而して「フレーベル」氏の新教育法は、恰も好く此の需要に適應せり。蓋し、その教育法の大概を言はゞ、共同の大なる机を置く中にも自から一人づゝに各自の倚子を定め、其の持場を定め以て其小さき領地内の所有者は彼なることを自認せしむ。斯て、面白き遊戯によりて、最初より其心を引立て、且つ恩物を漸次に之に示して順々に其能力を開發す。初は、色づけたる球又は幾何學的の固形躰を其目前に示して之をしせしむ、即はち其視力を養はしむ、外形、形容、似寄り、相違などを視別するの力を養はしむ、次に、此等の品物を其手にて取扱はしめ、眼に快ちよき色合に排列せしめ、又は思ふまゝの様々の形に組立しむ。次に、彩色したる物を種々の方向、形躰に列置し編置し、創思發明の心地を養ふ物種々様々に工夫せしむ。最后には、其手斯く忙はしく、其心斯く活動、其注意力眞に能く躍跚激舞せるに乘じ、物躰の性質用法に付きて問題を設け之に答へしめ、又之より引て一汎の法則自然の調和の事などに思ひ至らしめ、又此質地の問題を利用して更に高き道徳上の觀察に登らしむることをなす。此の如きは即はち「フレーベル」氏の教育法の要領也」と。

(八)、斯て、「フレーベル」は、此恩物の順序を下の如くに定めたり。其第一の女弟子ピッサロー云く、妄りに師が定めたる順序を變ゆるは、即はち其教育法の骨髓を

失ふに同じさ。左れど、必ずしも、「フレーベル」が定めたる儘の物品を用ひ千古變はらず万國一轍に走らんさするは寧ろ「フレーベル」が本意にあらざる可し。各國その風俗さその開化の度さを異にするに隨て、小兒開發の途に多少の相違なかる可らず、特に何如なる小兒にも皆な此さ同品の恩物を用ひんさするは出來がたきとなるべし。故に、能く國風を察し、その國々の子供の心理を學び、亦「所云る言はざる石をして言はしめたる」如く、日常の物品を利用して恩物さなすは即はち「フレーベル」が新教育の精神を活かすものさ云ふべき歟。左れど、この變通を爲すには先づ其常道を知らざる可らず、而して之を知ると共に能く變通を爲すに足るの創思力なかる可らず、これ尋常凡士の能はざる所也。

（九）、定例の恩物順序は左の如し、

球
球、立方躰、圓柱躰
八角の小立方躰
八角の瓦形躰
三十一に小分すべき大立方躰
以下略す

此順序は圖を示すとを要するに付「エミリー、シルレッフ」の幼稚園論を添へ、其卷末を示す、

## 四段　女弟子

（一）、ミス、ピーボデー其「幼稚園に對する講義」の中に云く、余は信ず尋常の婦人は、皆天然の良き幼稚園保姆たり、若したゝ其宗教上道德上の感想を發達し且つ少くさも只一の科學部門即ち例せば植物學の如き何處にても學ぶとを得べき一科學を學びて以て自然法則の多少を承知せば既に好く保姆たるとを得べし。故に信ず、凡ぞ婦人にして幼稚園の保姆たる教育を受るに堪へざるさきは、亦決して一個の母たるとをも得可からず」さ。蓋し婦人は生れ乍らの幼稚園保姆なり。

（二）、左れば、「フレーベル」は幼稚園に教育するに當り、深く此點に注意し切に婦人の同情を要め、之を勵まして保姆たらしめたり、斯くして其女弟子さなれるもの頗る多し。並に其長老、マレンホルツ、ピウロウ男爵夫人の事を記し例證さすべし。

（三）、ピウロウ夫人躰弱く、或るさき片田舍に吟行し、さある茶店に息ひて何事か變りしとなきかさ尋れたるに、店の婦人答ふらく、誠に珍らしき事の候、此邊りに子供を相手にして遊ぶ馬鹿者あり、宛ら之に魅せられたる様にて戯むれ居侍るさ申す。其時夫人は取分け氣にも止めでありしが、其后或時路傍の樹陰に白髮の老人あり周圍子供を集めて余念なく遊ぶ狀を見、これぞ例の馬鹿者ならめさ思起し、近よりて其語る所をきくに、暫らくにして乍ち感じ、直ちに其班に入りて老翁の談話を聞きぬ。この老翁は即はち、「フレーベル」なり。夫人は此時より其女弟子さなる。以后一生其尤さも熱心なる顯述者たり。プロシア政府が幼稚園教授の禁を解きたる后ち、自らこの教授の任に當りたり。

（四）、ピウロウ夫人に次ぎて名あるは、「フレーベル」が姪さして、フラウ、シウロイデルさ云へる女史なり。不幸にしてピウロウ夫人さ合はず、其意見も相違せしが、亦熱心なる「老翁」の弟子なり。

## 五段　物評

（一）、カムペーヤの「フレーベル」を評するや、少しく酷に失するものあり。左れど其言を聞くに曰く、フレーベルの著書を公平に且つ十分に修讀するに熱心に過ぎて稍や道理を失ひたる所ろ、尚且つ或る時は故ら熱心を造りたるにあらずやさ思はるゝ節あるを見て、之に感服し、過ちによりて反て奬勵せらるゝよりも、寧ろ心中やゝ不快の感なくんばあらず、實に「フレーベル」は教師さしての洪大なる資格を有せしに相違なし、然れども深長なる學識及び、好く平均したる思想に至つては、欠きたる所ろあり、…………其想像は万物を見て過大にし變形にす、其の實狀ありのまゝを認むるを能はず必らず之に標形的の意味を添え、漠然空大の想考に彷徨せるを多し…………左れど、其實行は其著書に優れり、幼年教育の野に於て大膽なる改革者たりし榮譽を之に歸するを疑すべきに非ずさ之れ寧ろ酷評なり、左れど其著書を讀むものは、多少この感なきと能はず、或る時は餘りに言過ぐるが如く思はれ厭倦の念を生ず、左れどこは彼が想像幻想の多き所以にして、年少森林の中に吟行し、言はざる石さ語り、動かざる木さ遊びたる感覺の發表に外ならず。ダイステルエグ（Diestirweg）「フレーベル」を評し彼は「ホラ」吹きなりさ云へり、左れど一さ度び其教場に參觀ぜるさきフレーベルが來觀者ありさも氣付かず一心不亂に其幼兒に教へつゝありし熱心風采狀貌言動を直

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

認し、乍ち其偏見を棄て、「フレーベル」が尤も熱實なる門弟の一人となりたり。フレーベルは當時に在ても既に人より誤解せられたり、然どもその誤解は、之を深く考ふると共に消失するの誤解なり。

(二)、「フレーベル」其徒弟を率ひて「イベルダン」に行き、ペスタロッチ、に從ふ彼は「ペスタロッチ」の門弟なり、彼自ら記して曰く、この時は余が一生に於ける定運の時期(decisive epoch)なりしと。「フレーベル」が開發的の教育は、根元を「ペスタロッチ」に發するものなり。左れど、二氏の風采行狀は自ら異る者なり、フレーベル氏は剛にして自ら信し殆ど屈せざりき、故に其の處置に不完全なる所ありとも之を自己の失とせず、反て運を非とし、若くは他人を責たり。ペスタロッチは殆んど自己を忘るゝものゝ如く、其衣服狀貌に至ては夢にも念頭に掛けざりしものと見へたり、氏の事を記載せる多くの傳記者は大抵云く、彼は何如に衣るべきかを知らず、其の考慮に沈むときは、襟飾を忘れまた靴下の紐を結ぶを忘れたり、と。之に反し、フレーベルは華美に裝はひ、時としては役者の様姿をなすかと思はるゝほどにて頗ぶる外貌に注意したり。

(三)、其教育は宗教的なり、而して其宗教は汎神的なりき。云く、凡そ、宗教の上に基ひせざる教育は皆な結果なしAll education that is not founded on religion is sterile 而して基督教の宗教の上に基ひせざる教育は皆な欠點あり不完全なりAll education that is not founded on the christian religion is defective and incomplete(フレーベル確言集中)、と。又云く、万物の目的運命は其の內本性(ビーイング)を開發するにあり即はちその中に働らく神の力と其の何にして働らくかの働らき様かを外面に發達するにありと。氏はこの前提信仰より立論推究して、人の教育は即はち人の中に存する神の性を現するにありと爲し、云く、人類の使命(ボケーション)は、その中に働く神の働きを表白するにあり、その神を外に現はするにあり、その眞實なる運命の智識を得るにあり、これを得るに、自由と自然とを以つてするにありと。即はち之れ一種の汎神論なり。夫れ汎神論は、未た純然たる基督の神の說にあらず、神の洪大なる偉德を賛美すと云ふと云へども、一個人の爲に神子を下す深愛の意義よりして見來れば、フレーベルが宗數論は未た高しと云ふ可らず、然れども彼をして其教育論を吐かしめ、又其教育を樂ましめたるものは實にその汎神論的なる此宗數上の觀念にありとす。然るに、「フレーベル」より此の汎神的なる觀念をすら尙ほ除却し去り、其の精神を脫離せしめ而して其の形骸を尊重せんとす。方今の日本教育家にして、フレーベルを愛すと云ふものは、實はフレーベルの死骨を拜する者なり。

(四)、「フレベル」か幼稚教育に對する注意と熱心とは深く尊とむべし、教育者切に之を賛へざる可らず。左れど其の教育方法に至ては、尙ほ多少の欠點あらざるなき乎。所云る、球、立方、圓、柱等を用ひて、之を教ゆると云ふとを極めて簡易にして而も、自然に適へるが如けれど、再考して其必らすしも然らざるを悟る。球、立方、圓柱は其狀甚だ簡易なりと云へとも、自然實際にこの狀躰のまゝにて存するものを見るは稀なり。或は球の如く、亦立方の如く、圓柱の如く、時としては、三者相混成するとを多しとす。然るに、之に其形躰を示して其實際を示さずたとへば、品物をありのまゝに現はさすして之を幾何學的に分割したる元形を現はすを之を簡易なりと云ふ可らず。スペンサーの教育論に、格言は一見して簡易なるものゝ如くして、實は甚だ複雜なるものなりと。故に、此の如き元形を示して最初に幼稚者の能力を開發せんとするは、宛がら抽象的の複雜なるものを初めに示すに異らず。左れば、フレーベル氏が恩物は未だ心理發達の正常順序に適はず、寧ろ實際の實物を使用して之より、立方、球、圓柱等の形躰を悟らしむるを可とす。但だそれ、如此く實際の品物を活用するに至ては頗る才識を要するとを思はざる可らず。尋常人の容易に爲しがたき所なり。

(五)、幼稚園及「フレーベル」の事に付き可讀書左の如し。

1. Education of Man.
2. Autobiography.
3. Reminicences of Froebel, by Baroness Marenholy-Bulow.
4. Child and child Nature, by the Baroness.
5. Kinder grater and child-culture, Henry Barnard.
6. 其他、左の諸氏夫々の著書あり、皆な、フレベルの精神主義を發揮演述す。

Miss Shirreff; Miss Manning;
Miss Syschinsba; Miss Hearwart;
Mdwe. De.Portugall; Miss Peabody;
H. C. Bowen; F. W. Parker; W. N. Hailman;



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Joseph Payne; W. T. Harris.
7. Education and Reformers. Quick.
8. Compae's History of Pedagogy.
9. Payne's History of education.

# 第八章

## ジーン、ジヤック、ルッツウ及びチーチウア

### 一段　時勢一偉人を生む

(一)、ルイ十四世の世は安樂太平の世なりけり、ボルテーアの世は不滿不平の世なりけり、貴族僧侶の專制壓抑極度に達し、王家の暴威私慾最上に達したり。乾一變して坤となり、機一とたび轉じて天下の大勢將に移らんとす、此の時に當て牡鳩の一聲を發ちて先づ絶叫するもの熱情熱腸の論者にてありける。

(二)、教育の事に至りても亦然り。凡そ教育史を講ずるものは、復古時代(Renaissance)より初む。復古時代とは、中世宗教的の過激なる教育より脱出し古のやー自由なる教育法に立反りたる時代を言ふなり。蓋し中世宗教的の教育論は肉を苦しめ情を矯め殆ど靈魂上の事のみを慮ばかりて、實際卑近の實用に頓着せざりしなり。左れば、十六世記の頃よりして次第に其反動を生じ古文古典を味ひ學ぶと共に教育の事を宗教的の事にのみ限らず多く實際の事に注目するに至りぬ。復古時代あるは止を得ざるとにして、この時代が教育余輪の進歩の上に益を與へたると小少ならず。左れど復古の傾亦た度に過ぎて其弊なきと能はず。只徒らに古典を學びて實際に自ら研究實試するとなきに至れり一の弊なり、文學を味ふとのみを專一とし之を實用するを思はざるに至れり、二の弊なり、隨て教育とは古典古文を學ぶとと誤解し學科上過度に之を脩むるに至れり三の弊なり、最后に子供の教育を放擲し子供は何の役にも立ぬものなりと信ずるに至れり四の弊なり。弊極まり最早や一轉して其正しきに反らざる可らず、こゝに於てか絶叫して之を善導するものあり。

(三)、ジーン、ジヤック、ルッツウは一般の世情に於て如此き不平不滿の世に生れ出で、教育上に於ては積弊鬱積したる如此き時世に立ちたり。此に於てか彼は怒ての事を熱罵熱嘲したり、社會上の組識を根底より改造せんとしたり、宗教上の信仰を土台より搖動せんとしたり、これ等の點に於て彼を學ばんに極めて有益なる研究たるべし。左れど余は今ま彼を教育學上の一點に於て觀察せんとす。

(四)、千丈の飛べる瀑布も亦た其源なきに非ず、教育上の積弊を打破撃碎したる痛快なるを彼が如きは稀なりと云へども、彼に至るに亦た多小の沿流なきに非ず。夫れ復古時代以后の弊害漸やく鬱積するにつれ、先づ、コメニアスComenius出でたり、次に、ロックLock出でたり、二先輩共に古典主義の教育に反對して、人の天性に隨へる實際當然の教育を主張したりしなり。故に、ルッツウも其エミールを著はすに至りて、説を此等の兩先輩に得たると頗ぶる多し。然れども、溌刺として千万の玉を散じ万丈の水落下して斷岸絶壁に百里の偉觀を呈出したるは即はち、彼ルッツウ也。ルッツウに至りて積弊を白露し破碎したり。

(五)、ロバート、ヒバート、クイツク氏、其「教育界改革者評傳」中に云へらく。教育史中に出會ふべき偉人を分ちて二種となす、一は思考の人なり、二は實行の人なり、二者たるに何れを優れり何れを劣れりとすべきにあらず、歴史は余輩に告て曰く、第一等の實際的學校教師は、ジヨン、スタルム(John Sturm)(一五〇七―一五八九)(ストラッバーグ、中學校教師)又は多くの「ゼスイト」派の教師なりと、實に彼等は最良の師なりしが其説に至ては、毫も新しきものなく、たゞ通常一般の學説を精く知り細かに實用したるに過ぎざりし也。然るに之に反し、モンテンの如き、ロックの如き、當世流行せる一般の學説を斥そけ一新學派を開かんとしたる大思想家なりと云へども、之が爲に同時に實際の教育家にてはあらざりき。チルフガン、ラトケ(Wolfgang Raticlius)一五七一―一六三五、ホルスタインに生れ后ち英國に移る)が其學説を實行すると能はず、コメニアスが、Vestibulum, Janna等に論出したる自説を實行せんとて失敗したる如き皆是なり。而して、この「思想」が流行して遂に「實行者」に會するに至る迄には久しき間だ流れ行き平々凡々の境界に迄で到來ざる可らず。思ふに、大思想の進歩は猶ほ大河の流の如きか。其泉源に近きほど奇觀美觀ありと云へ共、此處には大抵實用に適せざるものなり、先づ其發出したる山々の間を離れ、千丈の瀑布となるにはあ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

再版

巖本善治妻譯

# 小公子

（リツトル。ロードフホントルロイ）

小供のよみ本

## クリスマスの贈物

森田思軒居士の批評

（前略）又た若松賤子を得たり「小公子」の若きは小生竊かに推して廿年來第一の譯となす唯一と云ふに非ず第一の等列に在るべきを云ふなり「雛嫁」は驟かに之を看れば少しく「小公子」に遜るに似たり然れども之を邦語に移すに當りて「フホントロイ」と「カパフヒールド」とは其事其文兩ながら難易甚だ同じからず遽かに軒輊す可からざるなり。（早稻田文學第二拾三號）

（批評）〇十一月十五日讀賣新聞〇經濟雜誌五百九拾八號〇巖谷季雄君〇十一月十三日報知新聞〇十一月十七日中央新聞〇早稻田文學四號〇國民の友百卅八號〇十一月廿六日國民新聞〇十一月十七日中正日報〇亞細亞廿二號〇護敎廿二號〇下田歌子君〇中島俊子君〇石橋忍月君〇一月十六日自由新聞。

定價金三拾八錢の所今回クリスマスの贈物として特別
金廿八錢（郵税金八錢）に引下候間續々購求被下度候

發行所 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

クリスマスの贈物

は面白き勸懲繪草紙にして第一小供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土産遺物としては無類のものに候

定價一册五錢
郵送料二錢

其他

| | | | |
|---|---|---|---|
| 木村鐙子之傳 | 全一册 | 正價金八錢 | 郵税金貳錢 |
| 子供のはなし | 全一册 | 正價金五錢 | 郵税金二錢 |
| 西洋女禮 | 全一册 | 正價金拾二錢 | 郵税なし |
| 看護婦美談 | 全一册 | 正價金二十五錢 | 郵税金六錢 |
| 百人一首講義 | 全一册 | 正價金貳拾八錢 | 郵税金四錢 |
| 淺瀨の波 | 全一册 | 正價金三拾錢 | 郵税金四錢 |
| 蓬萊曲 | 全一册 | 正價金八錢 | 郵税金二錢 |

發賣所 東京麹町區下六番町 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

故近藤賢三君 高橋要亮君同著

増訂三版

# 經濟秘法 廢物利用

上下合本

正價金三拾五錢
郵税金四錢

## 目次


魚類の廢物より石鹼を製する事
藻を以て紙を製する事
魚類にて紙を製する事
鯨の上肉より蠟を採る事
海草より砂糖を採製する事
牛馬豕の血液より大利を得る事
馬肉を食用にすべき事
牛の毛用ひ方種々ある事
松樹よりテレビン油を採製する事
松の木にて綿又は布を造る事
茗荷にて糸を製する新法の事
蒲草より綿を採る事
桑の皮より綿を採る事
玉蜀黍の莖より糖蜜を製する事
松葉を用て布團綿を製する事
甘藷は用ひ方にて大利を得へき事
石決明、タガヒ等の介殼を釦鈕となす事
澁柿を用て砂糖を製する事
石を煮て和らかにて器物を造る事
青竹を煮て白色にする事
角を煮て糊餅の如くし之を器に作る事
玉蜀黍の莖をコルクに代用する事
椰實にて食物を製する事
食物を新鮮の儘にて貯へ置く事
牛肉鳥肉を柔軟に煮る事
桑の皮より紙を製する事
馬鈴薯より乾酪を製する事
廢衣より藍を製する事
古靴の利用法
馬鈴薯にて澱粉を採る事
酒糟にて醬油を造る事
柚餅子の製法
落花生の搾粕にて味噌を製する事
藤蔓にて布を製する事
獸角の細工物に著色する事
紙を以て夜具を製する事
大口魚の無臭肝油を製する事
杉の葉にて線香を製する事
眞珠を摸造する事
藕にて綿を製する事
桃梅樹より護謨を採る事
馬鈴薯よりアラビヤ護謨を製する事
蕈類を以て板材を製する發明
菓實よりアルコールを製する事
床の下の土より硝石を取る事
生骨の煮汁より膠を採る事
蛙の皮の利用する事
綿布の油汚を脱く事
衣服に汚點の附きたるを脱く事
白フランチルを洗濯する事


其他百四拾六件


發賣

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

# 社告

## 歳暮。書籍呈上廣告

本年初夏女學雜誌改正いたし、新規御購讀者増加致候に付、少さか祝意と感謝を表せむが爲めに、此度左に書籍を進呈致候。

十二月廿日迄に女學雜誌前金御拂込の向へは

拾三册前金御拂込口へ　つれ〴〵草講義。文法口授。植物學講義。木村鐙子の傳。婚姻論。の内御望の書籍一部進呈。

貳拾六册前金御拂込口へ　鈴木弘恭大人著の四版百八一首講義一部進呈。

五拾二册前金御拂込口へ　御高評を得たる若松賤子譯の再版小公子一部進呈。

右は社運隆盛の祝として、微か弊社が、年來の御愛讀に酬ひむため、詮する所ろ、世上花客多きの故に御座候、爰に謹で御愛讀諸君に謝し奉候。

東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社



**第九號**　十一月廿一日發兌毎月一回一册七錢六册前金四十錢府外郵稅五厘

## 城南評論

不知庵主人の文學の範圍及び其定義を異む　寺山星川
淨瑠璃史稿(浪華)　寺山星川
岐阜提燈　森槐南
感恩珠(春濤詩話)　岩溪裳川
俳話一則　竹文、靜淵
粂八一座　松葉子
秋の歌　惜寸暇文房
旅行の歌　太古庵主人
「新刊文書」
無題十一則(くちわる男)唐詩選評釋の評(陶子箋)小櫻縅を讀む(飯田四丁)
「雜錄」
櫻坪隱士に告ぐ(橫柄隱士)日本文學史料(佐々木信綱)

發行所　赤坂區靈南坂町二十五番地　**城南評論社**

◉注意　淨瑠璃史は本號にて浪華の部に移り有名なる竹本義太夫の傳記評記を掲ぐ


Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 婦人立志篇

竹越竹代著

德富猪一郎氏序文　巖本善治氏序文

紙數百五十八頁
定價二十錢
郵税四錢

木板小口彫　密書入
十一月十二日發賣

今日文學社會の一大缺點は婦人の立志篇なきにあり、實際古來の女傑が如何なる振舞を爲したるかを示めすにあらずんば如何に婦人の立志を論ずるも空言のみ、今や婦人立志篇出づ、是より女性立志の㕥となること少からざるべし。此書は數多の泰西婦人傳より萃を抜きて譯出し、之に挿さむに古來大學者の道德の訓言を以てしたるものにして、其文章は德富氏の評言の如く、清淡にして俊逸、何人も讀みて解すべく、其事は簡にして要を盡くし人をして欽誦巻を措く能はさらしむ。

書中記する所は政治家あり、敎育家あり、文學者あり、旅行家あり、貞婦賢母あり、慈善家あり、苟も之を讀みて古來の婦人には、此の如き女傑あるを見れば、如何なる婦人も志を立つること難からず、高潔なる家庭、女學生の室内には、必らず一本を備へざるべからず故に女學生の父兄母姉、女學校の敎師諸君が、此廣告を見て、多くの人々へ分ち給はんことを切に出版者の望む所なり

クリスマス、正月の贈物、學校の賞品、家庭の讀本によろし

# 吾家の歷史

聽天居主人編

上製定價三十錢
並製定價二十五錢
郵税六錢
十一月十七日發賣

何れの家にも日記なかる可からず、日記なき家は不整頓にして成功なき家也。

『吾家の歷史』は泰西各國の日記簿などを參照して新奇なる意匠を以て作りたる日記簿也。上下には歷史上の出來事の同月同日なるものを記して回顧に便にし、左欄には古人の金言を記して坐右の銘とし右傍には古詩古歌の秀逸なるものを錄して誦咏に便にす

『往來』には友人と往來したる事を記すべく『爲したる事』には其日の事業を記すべく『得たる思想』は今日思ひつきたる事を記すべく『社會の出來事』には其日社會に起りたる事を記して後日の便に供し以上の欄に入る可らざる事は雜事に載すべし

『吾家の歷史』は紙數四百ペーヂにして一月一日より初まり、十二月卅一日まであり此外每月の初には其月に爲すべき農事園藝、料理、衞生及び百般の事を記しあれば、日記となるのみならずまた家庭全書と云ふべし、クリスマス、正月の贈物、學校賞品には頗る可也

發兌　東京新橋出雲町壹番地　警醒社書店

賣捌　女學雜誌社

一書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割増に限る

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃さも濟にして御送付相成度候

## 女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

| | 前金 | 府外 |
|---|---|---|
| 十册 | 五十八錢 | 六拾三錢 |
| 廿六册（半年） | 同 一圓四十三錢 | 同 一圓五十六錢 |
| 五十二册（一年） | 同 二圓六十錢 | 同 二圓八十六錢 |

○白赤の内一方購讀の分

| | 前金 | 府外 |
|---|---|---|
| 六册 | 三十五錢 | 三十八錢 |
| 十三册（半年） | 同 七十三錢 | 同 七十八錢 |
| 廿六册（一年） | 同 一圓三十錢 | 同 一圓四十三錢 |
| 一册 金六錢 | 郵税 金五厘 | |

## 廣告料及無料廣告

| | | |
|---|---|---|
| 一行（廿七字詰） | 一回 | 前金拾錢 |
| 同 | 三回以上 | 一割引 |
| 同 | 六回以上 | 二割引 |

○十行以上一割引。二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

東京市麴町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY